

公益財団法人日本バスケットボール協会

2021 年度 7-6 月期事業報告

<事業の概況>

公益財団法人日本バスケットボール協会（以下、JBA）では、先期（2020 年度 7-6 月期）に引き続き、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、多くの事業において、延期や事業内容の変更を余儀なくされた。しかし、「バスケットで日本を元気に」するべく、バスケットボールの安心安全な競技環境の維持に努め、歩みを止めることなく活動を行った。

2021 年度 7-6 月期の重点実施事項は下記の 8 点であった。

- 東京五輪以降の 2023 年 FIBA ワールドカップ、2024 年パリ五輪（男女 5 人制・男女 3 人制）に向け、強化体制を構築する
- 都道府県バスケットボール協会、トップリーグ、各種連盟等との連携を強化し、刻々と変化する状況に臨機応変に対応しながら、事業を遂行するとともに、バスケットボールの価値向上に努める
- 新型コロナウイルス感染症拡大防止対策を講じ、関わる方の安全・安心を確保した上で、日本代表戦・ウインターカップをはじめとする JBA 主管大会を開催し、バスケットボールの価値向上に努める
- 「JBS2021」の実現に向け、最適な組織体制を構築、より効率的・効果的な組織運営を行う
- 暴力暴言等根絶の実現に向け、ALL バスケ体制で各種施策を推進する
- JBA 未登録競技者層（ファーストスポーツ含む）へのアプローチに向けた施策の検討実施を行う
- 競技者に加えて、審判/指導者等の登録を推進することで、バスケットボールの質を向上させ、バスケットボールファミリーの拡大を図る
- リーグ戦文化の醸成等、選手育成や競技環境の充実に向けた各種事業の実施・制度設計を行う
- 「FIBA バスケットボールワールドカップ 2023」に向け、ステークホルダーとの連携を強化し、準備を進める

(1) バスケットボール界全体の組織基盤の強化、スポーツ団体ガバナンスコードに適合した運営の実施

2021 年 2 月に JBA の「中央競技団体向けガバナンスコード」が承認され、公式ウェブサイトにて公表を行ったが、今期は JOC/JSPO による適合性審査が 9 月に行われ、承認を得ることができた。

また、毎年ガバナンスコードの遵守状況に関する自己説明を行うこととなっているため、2021 年 10 月度の理事会において承認された内容について JOC/JSPO へ自己説明を行い、同時に JBA 公式ウェブサイトにおいても公表を行った。

加えて JBA としてバスケットボール界全体の組織基盤の更なる強化と適正なガバナンスの確保を図るため、加盟団体および各種連盟に対し、「一般スポーツ団体向けガバナンスコード」の対応を 2021 年 3 月までに完了して頂く計画を立てて推進していたところ、コロナ禍の影響により、期限を 2021 年 12 月に後ろ倒しするなどの対応を余儀なくされたものの、全ての加盟団体・各種連盟において、期限までに対応を完了して頂くことができた。

(2) 東京オリンピックに向けた代表チームの強化と、審判/指導者/TO 人材の育成・強化

東京 2020 オリンピックにおいて、女子日本代表が史上初めて銀メダルを獲得するとともに、新たに種目として採用された 3x3 では、男女ともに入賞を果たした。また、女子日本代表はアジアカップでも 5 連覇を達成し、2022 年 9 月に開催される FIBA 女子ワールドカップの出場権も獲得するなど、世界において一定の地位を獲得した。

他方、男子日本代表においては、2023 年沖縄開催のワールドカップに向けて、若手選手の積極的な登用など、チーム作りに注力した。

審判・指導者・TO、更には競技を支える人員の確保・育成は昨今の環境においては非常に重要であるため、これら「ささえる・たずさわる」方々への情報共有や新規人材の確保にも着手し、バスケットボールファミリーの拡大に努めた。具体的に

はコロナ禍によって講習会や研修会の実施が難しい状況にあったが、WEB 会議等を積極的に活用し、「学びの場」の維持に努めた。

(3) バスケットボール競技の価値向上に向けたマーケティング戦略の推進と拡大

コロナ禍の影響により、JBA 主催大会や各種事業の開催にあたり、前期においては入場制限付きの実施となったが、後期においては開催地行政とも連動し、万全の対策を施すことで、100%収容の承認を得て事業を実施することが出来た。ステークホルダーの権利を守るとともに、東京 2020 オリンピックで集めた注目を一過性のものにしないよう努めた。

(4) JAPAN BASKETBALL OFFICE の体制整備と機能強化

先期に引き続き、JBA のオフィスはリモートワーク中心となったが、JBA/B リーグ/BCP/BMK/WJBL 職員および JBA/B リーグ役員（理事・監事）も参加する「ALL バスケットボール朝会」を開催し、情報や方針の共有に努めた。また、全体として、WEB 会議中心となることで、業務の効率化や密なコミュニケーションを図ることに努めた。

(5) 「JBS2021」に基づく中期経営計画

「JBS2021」に基づき、バスケットボールの普及・登録推進、事業性の拡大、更なる代表強化・次世代選手の発掘育成に向けた具体策の検討・実行プランの策定を行った。

<活動報告（概況）>

I 日本代表関連

1. 男子日本代表概況

収束の兆しが見えないコロナ禍の状況ではあったが、東京 2020 オリンピックを含め、延期されていた国際大会が開催され、A 代表・アンダーカテゴリー代表ともにオリンピック後の新体制へと移行している。

A 代表については、2021 年 6 月から継続して行ってきた強化合宿を引き続き行い、東京オリンピック最終ロスターを確定した。2021 年 7 月初旬には沖縄で 3 試合（ハンガリー代表、ベルギー代表、フィンランド代表）の強化試合を行い、オリンピックの最終調整として、埼玉で 2 試合（ベルギー代表、フランス代表）の強化試合を行った。埼玉では、世界トップレベルのフランス代表に勝利するなど、東京オリンピックに向けてベストな状況で臨む事ができた。

東京オリンピックでは、選手村に滞在し、コンディションを整えながら本戦に挑んだ。予選ラウンドでは、スペイン代表、スロベニア代表、アルゼンチン代表と対戦し、結果 0 勝 3 敗、大会全体として、11/12 位となった。東京オリンピック終了後、フリオ・ラマス監督が退任し、その後任として、東京オリンピックで女子日本代表監督として銀メダルを獲得したトム・ホーバス氏が新たに男子代表監督に就任した。

ホーバス監督就任後にはオリンピックおよびワールドカップ経験選手を含め、改めて選手選考を実施。ホーバス監督は女子代表で用いたスピードバスケットボール、ファイブアウト、3P を中心とするバスケットボール戦術を引き続き用い、それに合う選手を選考した。新体制となり臨んだワールドカップ予選 Window①-③では、新しいバスケットボールスタイルを浸透させることに時間を要したが、2 勝 4 敗で予選を終え、自力で 2 次予選へと進出した。ホーバス監督は、日本代表の文化を変革することにも着手しており、時間が経つにつれて、それも徐々に浸透しつつある。2022 年 7 月以降も延期されたアジアカップやワールドカップ予選 Window が続くため、引き続き 2023 年のワールドカップに向けて強化活動を継続していく。

U22 代表については、2022 年 6 月に延期となっていた FISU ワールドユニバーシティーゲームズが再度 2023 年 8 月に延期となったが、最終選手選考も含め活動は進んでいたため 2022 年 6 月の女子国際強化試合の際のエキシビジョンマッチとして全日本学生選抜との試合を有観客の中で開催し、臨場感のある実戦の機会を設けた。

U19 代表は U18 アジア選手権の中止により、FIBA ランキングに基づいて 2021 年 7 月開催の FIBA U19 ワールドカップの出場権を獲得。選手選考についてはこれまで強化を継続してきた U16・U18 代表から選出し、結果的に U16 世

代からメンバーの約半数を上位カテゴリーに引き上げる形となり、最年少では当時 16 歳の川島悠翔／福大大濠高が選出されるなど一気通貫の強化を強調する機会となった。

U18 以下のアンダーカテゴリー代表については、2022 年 4 月よりスペインや中国のアンダーカテゴリー代表を率いた経歴を持つ、アレハンドロ・マルチネス氏を新たにヘッドコーチとして招聘し、以降新たな体制で臨むこととなった。

U18 代表については 2022 年 8 月に開催される FIBA U18 アジア選手権へ向け、2022 年 4 月より活動を開始。コロナの影響もあり限りある強化期間ではあったが、選手選考を重ね大会に臨む準備ができた。

U16 代表についてはマルチネス氏の指揮のもと、2022 年 6 月にカタール・ドーハで開催された FIBA U16 アジア選手権において史上初の 2 位となり、2022 年 7 月にスペインで行われる U17 ワールドカップの出場権を獲得した。U16 アジア選手権では次世代の日本代表の中心選手として期待のかかる、前述の川島悠翔が大会 MVP を獲得するなど個人としての活躍も目立ち、今後の日本代表の若手としても大いに期待できる流れとなっている。

2. 女子日本代表概況

女子日本代表は、コロナ禍によりこれまで休止していた強化活動を 2021 年 4 月より再開。NTC を拠点として徹底的に外部接触を避ける形で集中した強化活動を実施。7 月に三井不動産カップにおいてベルギー、プエルトリコとの 2 戦で最終調整を行い、東京オリンピックに備えた。東京オリンピックにおいては予選ラウンド 2 位通過、決勝トーナメントでベルギー、フランスにそれぞれ勝利して決勝進出。決勝ではアメリカに 75-90 で敗戦したが、史上初の銀メダルを獲得した。

その後、2021 年 9 月開催の FIBA 女子アジアカップに向けて体制を一新し、恩塚亨氏がヘッドコーチに就任。東京オリンピック終了直後から新たな日本代表チームとして強化活動を開始し大会に備えた。FIBA アジアカップでは予選ラウンドから順調に勝利を挙げ、準決勝をオーストラリア、決勝を中国にそれぞれ競り勝ち優勝。こちらも大会史上初の 5 連覇を達成し、大会 MVP に赤穂ひまわり選手が選出された。なお、外務省が定める水際対策により、帰国後 2 週間待機施設において自主待機を行った。

さらに 2022 年 1 月からは、2 月に大阪開催が決まった FIBA 女子ワールドカップ 2022 予選に向けた強化活動を実施。大阪会場では、日本、カナダ、ボスニア・ヘルツェゴビナが参加（ベラルーシは新型コロナウイルス感染症感染により出場辞退）。日本は 1 勝 1 敗でワールドカップ出場権を獲得した。こちらも国内大会でありながら、防疫対策として 5 日間の自主隔離が必要となった。また、2022 年 9 月に開催予定であった第 19 回アジア競技大会（2022/杭州）に向け、日本代表のうちアジア競技大会代表の指導体制や候補選手の選考、大会への選手登録等の手続きを進めていたが、2022 年 5 月に中国国内のパンデミックの影響で突如延期が決定し、選手選考や強化活動の一切を停止した。

女子ユニバ代表は、2022 年 6 月に延期された FISU ワールドユニバーシティゲームズに向け、改めて 2021 年 12 月から日本代表候補選手選考に着手。しかし 2022 年 2 月以降は感染再拡大の煽りを受けて強化活動を延期し、4 月以降の再開を計画していたところ、5 月に本大会の再延期が決定。延期後の出場資格等が確認できるまで強化活動等は延期することとなった。

女子 U19 代表は、FIBA 女子 U19 ワールドカップの出場に向け、山梨県忍野村にて強化合宿および最終選考を実施。最終合宿を茨城県ひたちなか市にて実施し、本大会に出場。初戦カナダに勝利し幸先よくスタートしたが、その後の予選ラウンドおよび Round of 16 で敗れてベスト 8 以上進出が断たれたが、その後の順位決定戦に全て勝利し、第 9 位で大会を終えた。

女子 U18 代表は、2022 年 9 月インド開催の FIBA U18 女子アジア選手権に向け、4 月よりエントリーキャンプを実施。5 月には日本代表候補選手 16 名で第 1 次強化合宿を実施した。

女子 U16 代表は、2022 年に延期された FIBA U16 女子アジア選手権に向け、7 月の U16 エントリーキャンプより強化活動を実施。FIBA U16 女子アジア選手権で準優勝し、翌月開催の FIBA U17 女子ワールドカップの出場権を獲得した。

3. 男子 3x3 日本代表概況

男子 A 代表は、東京 2020 オリンピックにおいて 6 位入賞を果たした。目標としていたメダル獲得には届かなかったが、予選リーグでは多くの試合で接戦の展開に持ち込み、決勝トーナメント進出をかけた中国戦では勝負所で逆転勝利を収めるなど、世界の強豪国と対等に渡りあうことが出来た。

2022 年 6 月からはパリオリンピックに向けて始動し、同月末に開催された FIBA3x3 ワールドカップ 2022 に向けて、国内合宿やオーストリア遠征等の強化を図った。同ワールドカップでは予選敗退となり、世界で勝ち抜く難しさを改めて痛感することとなった。

U23 代表では、2022 年度の出場対象大会となる FIBA3x3 ネーションズリーグ（U23/U21）、アジア競技大会（延期が決定）、FIBA3x3 U23 ワールドカップに向けた新たな選手の発掘・強化等の取り組みとして、2022 年 3 月に強化合宿を行った。

U18 代表では、コロナ禍の影響により国際大会の延期が続き、代表強化活動は全て見送っている。

4. 女子 3x3 日本代表概況

女子 A 代表は、東京 2020 オリンピックにおいて 5 位入賞を果たした。オリンピック予選を勝ち抜いた自信と経験から、アメリカに出場国の中で唯一勝利を挙げるなど、予選リーグでは全 7 試合中 5 勝と、世界の強豪国相手に勝利を重ねた。最終目標としていた金メダル獲得には至らなかったものの、オリンピック予選から本戦の過程の中で、男子同様に世界に日本の 3x3 を表現することが出来た。

2022 年 6 月からはパリオリンピックに向けて始動し、同月末に開催された FIBA3x3 ワールドカップ 2022 に向けて、国内合宿やオーストリア遠征等の強化を図った。同ワールドカップでは予選敗退を喫し、オリンピック以降の世界の 3x3 競技レベルの成長スピードを感じる事となった。

U23 代表では、2022 年度の出場対象大会となる FIBA3x3 ネーションズリーグ（U23/U21）、アジア競技大会（延期が決定）、FIBA3x3 U23 ワールドカップに向けた新たな選手の発掘・強化等の取り組みとして、2022 年 4 月に強化合宿を行った。この合宿から、A 代表メンバーとなる選手の発掘に繋がるなど、有意義な機会となった。

U18 代表では、コロナ禍の影響により国際大会の延期が続き、代表強化活動は全て見送っている。

II 国際

1. 国際関連活動概況

先期はコロナ禍の影響により、東京オリンピックを含め、多くの国際大会が延期となった。今期もコロナ禍の影響はあったが、東京オリンピック、FIBA ワールドカップ 2023 予選が開催され、日本においては FIBA 女子ワールドカップ 2022 予選を 2022 年 2 月に大阪で開催。FIBA および FIBA アジアオフィスと連携を図り、無事に全大会を開催することが出来た。また、東京オリンピックに向け、多くの強豪国との強化試合も調整することが出来た。

会議は依然として WEB 開催を余儀なくされたが、会議以外においても FIBA および各国 NF と密に連絡を取り、円滑に情報収集出来る体制を維持。

今期終盤には渡航制限も徐々に解除され始め、来期においては海外における大会等を含めた活動が増加することが予測されるため、渡航制限を含め、各国の状況を確認しながら国際活動の促進を図る。

III 育成

1. 選手育成事業概況

コロナ禍の影響により、都道府県育成センターは都道府県の実情により回数を減少させながらもできる限り行った。U14/U15 ナショナル育成センター・ジュニアユースアカデミーはトライアウトおよびキャンプ 2 回を実施、実施内容を映像撮影して編集し、指導者講習に役立てることとした。ユース育成部会ではワーキンググループを設置し、ユース育成事業に関

する課題について分かれて詳細な協議を行った。ユース育成担当者会議を 2021 年 11 月、2022 年 6 月に実施し、2021-22 年度のユース育成事業について伝達を行った。

2. マンツーマン推進事業概況

2021 年 8 月には全中ブロック大会で講習会を実施。2021 年 12 月にマンツーマンディレクター会議（WEB 会議）、2021 年 8 月の全中大会、2022 年 1 月の全国 U15 選手権大会と 3 月の全国ミニ大会にてマンツーマンコミッショナー派遣・運営を実施。2022 年 6 月にはマンツーマンディレクター会議を臨時開催し（WEB 会議）、今後の方向性について協議した。

3. 指導者養成事業概況

コロナ禍の影響はあったものの、オンライン実施に移行できるものはオンラインで実施し事業の継続に努めた。オンラインにて実施した事業は、S 級コーチ養成講習会、全国バスケットボールコーチクリニック、コーチカンファレンス、授業研究会、トップリーグ向け C 級・D 級コーチ養成講習会、女性コーチカンファレンス、全国指導者養成委員長会議、指導者養成委員長会議である。感染症対策を講じた上で、対面で実施した事業は A 級コーチ養成講習会、B 級コーチ養成講習会（全 6 回）である。ジュニアエキスパート講習会については、感染症拡大の影響もあってか、開催人数に至らず中止となった。

その他、コロナ禍ではあったが、新たに取り組むことができた事業もある。キッズ関連事業として、北海道協会の協力を得てキッズサポートリーダーモデル講習会、キッズサポーター講習会を対面にて実施することが出来た。また、デベロッパー関連事業として、A 級・B 級担当コーチデベロッパー研修会、都道府県コーチデベロッパー勉強会を実施した。その他、都道府県の事業実施状況の調査・把握、小学校体育教材の作成に取り組んだ。

IV 競技・運営（3x3 含む）

1. 国内競技会概況

今期は先期に引き続き、with コロナの状況下での大会運営を強いられることとなった。JBA のスポーツ医学委員のドクターと共に、時々の感染状況に応じて、適宜ガイドラインのマイナーチェンジを施していった。

天皇杯・皇后杯については、コロナ禍の影響により 1 次ラウンドを中止して 2 次ラウンドから大会を進めることとし、天皇杯の 2 次ラウンドの代替日での再試合やクォーターファイナルでの出場辞退などが生じながらも、何とか最後まで大会をやり遂げるに至った。皇后杯は ENEOS サンフローズが 9 連覇を成し遂げ、天皇杯は川崎プレブサンダースが、決勝で千葉ジェッツを下し大会 2 連覇を果たした。

ウインターカップについては、前大会において開志国際高校に辞退勧告を出さざるを得ない状況となったことを教訓に、濃厚接触者になりうる選手・スタッフに対しても、迅速に PCR 検査を受けられるような体制を構築して臨んだ。結果的には、本大会に参加したチームの選手・スタッフから体調不良者や陽性者が発出することなく無事に大会を終えることが出来た。競技としては、男子は福岡大学附属大濠高校が 28 大会ぶり 3 回目のウインターカップ制覇を果たし、女子は桜花学園高校が 3 年連続 24 回目の優勝に輝いた。

ジュニアウインターカップについては、ウインターカップに続きコロナに拠る大きなトラブルはなく大会を実施することが出来た。また競技者への負担を軽減すべく、大会日程を 4 日間から 5 日間に変更し余裕を持ったスケジュールにて実施することが出来た。男子は神戸市立本山南中に所属していた選手をベースに構成するクラブチームであるゴッドドアが、女子は四日市マリノール学院中学校が、それぞれ優勝を果たした。

全国ミニ大会については、再びコロナ感染が拡大する中、期間前の陽性者や濃厚接触者が散発した。陽性者や濃厚接触者の復帰フローにやや厳格性を持たせていたが、参加チームからの強い要望もあり、ドクターとも協議した上で、復帰フローを緩和するなど（プレーはさせずにベンチ入りのみ許容するなど）のフレキシブルな対応を行った。

2. 国際競技会（国内開催）概況

2021年7月、沖縄（沖縄アリーナ）にてフィンランド、ハンガリー、ベルギーの3ヶ国を招いた男子日本代表の強化試合を開催（男子日本代表国際強化試合沖縄大会）。男子日本代表は初戦のハンガリーには勝利したものの、ベルギーおよびフィンランドには2連敗を喫した。その後、同月に埼玉（サイデン化学アリーナ）にて男子日本代表はベルギー、フランスと、女子日本代表はベルギー、プエルトリコとそれぞれ対戦した（男女日本代表国際強化試合埼玉大会）。男子においては対戦予定であったセルビアが、オリンピック最終予選で敗退したことで急遽来日を取りやめることとなり、直前に沖縄大会で対戦していたベルギーチームに埼玉大会まで参加頂くようオファーして快諾を得ることが出来たため、何とか大会フォーマットを変更することなく大会を実施することが出来た。結果として男子はベルギーにリベンジを果たし、強豪フランスにも見事勝利することが出来た。女子もベルギー、プエルトリコに危なげなく勝利を収めた。

なお、いずれの海外チームの来日に際しても、スポーツ庁をはじめ関係省庁より「特段の事情」として、コロナ禍における入国を許可されることとなった。その条件として、公共交通機関の不利用（沖縄へのチャーター機手配）や宿泊施設のフロア貸切り等の所謂バブル構築や、期間中のPCR検査実施等の厳しい条件が課された。これにより、大会運営コストが大幅に高むこととなった。

一方、東京オリンピック前ということでバスケットボールも注目を浴び、NBAで活躍する八村選手の人気も相まって、各大会で多くのお客様にご来場頂くことが出来た。このような環境下での試合を経験できたことが、特に女子に関しては東京オリンピックでの銀メダル獲得という快挙の一助になったとも言える。

東京オリンピック後は、まず2022年2月に男女ワールドカップ予選を国内で開催。2022年2月10日～13日には大阪（おおきにアリーナ舞洲）にて「FIBA女子ワールドカップ2022予選」をカナダ、ベラルーシ、ボスニア・ヘルツェゴビナの参加により開催予定であったところ、ベラルーシが出国直前にコロナ陽性者の多発により急遽大会参加を取りやめ、チケットの払い戻しや関係省庁への連絡等、突発的な対応に追われることとなったが、残りの3ヶ国で無事予選を実施することが出来た。結果としては、女子日本代表はカナダに勝利したが、ボスニア・ヘルツェゴビナには惜敗した。

2022年2月25日～28日には再び沖縄（沖縄アリーナ）にて「FIBAワールドカップ2023アジア地区予選」Window2をオーストラリア、チャイニーズ・タイペイの参加により開催した。結果としては、男子日本代表はチャイニーズ・タイペイ相手に何とか勝利を収めることが出来たが、オーストラリアには完敗した。

なお、これら2022年2月の男女ワールドカップ予選は、いずれもコロナ禍の影響により、集客は厳しい結果となった。

その後、2022年6月18日～19日に千葉（千葉ポートアリーナ）にてトルコを招いた女子日本代表の強化試合2試合を開催した。女子日本代表は、FIBAランキング9位の強豪相手に危なげなく2連勝を収めることが出来た。また18日にはエキシビジョンマッチとして、男子U22日本代表 vs. 日本学生選抜の試合も実施した。本大会では2月の集客不振を糧に、大会告知プロモーションに注力し、また将来のバスケットファン獲得のための種まきとして積極的な動員を図り、4千人を超える多くのお客様にご来場頂くことが叶った。

3. 3x3 国内大会概況

先期に引き続き、今期もコロナ禍の影響を受け、感染対策を講じた上で各種大会を開催したが、東京オリンピックを経て競技普及に弾みをつける一年になる予定であったが、コロナ禍は収束せず、可能な範囲での開催にとどまる一年となった。感染症対策としては、参加全試合チーム関係者に対して2週間前からの体調管理の報告義務、試合会場での受付時の体調確認、会場内には消毒用アルコールの設置などを行った。

JAPAN TOURは4月～11月で開催するため、今期は2021シーズンの7月～11月開催分、2022シーズンの4月～6月開催分を実施した。2021シーズンはFINALを含めて全試合無観客での開催となったため、YouTubeでのLIVE配信を行うなど周知に努めた。2022シーズンはEXTREME、OPEN、CHALLENGE共に4月より各感染症対策を行いながら屋外での有観客開催を主に実施した。大会直前に新型コロナウイルス感染が判明する事例は後を絶たな

い状況が続いたが、安全面を確保した選手については直前までエントリー変更を認めるなど可能な限りチームが参加できる環境を維持した。また大会期間中における関係者の体調不良等も発生せず実施できた。

日本選手権大会は U18、OPEN 共に、新型コロナウイルスの影響を大きく受けた。特に年明け 2022 年 1 月に開催される予定であった日本選手権エリア大会開催時期には、第 6 波により緊急事態宣言が発出された影響で東エリア大会、西エリア大会において辞退チームが多数出たため、大会は開催せず両エリアからチームを推薦する対応を取るなどして本大会を実施、無事大会を終了することができた。

新規事業として U23/大学世代への普及事業として関東大学トップレベルの選手が参加したイベントを実施し、来期に向けた足がかりを作ることができた。

V 審判

1. 審判事業概況

今期は、先期に引き続きコロナ禍の中ではあったが、感染防止対策を実施した上で原則オンラインでの各種講習会、研修会や審判派遣事業を再開してきた。先期は中止した新規審判/インストラクターライセンスの講習会を原則再開。S 級審査会については数回の延期があったが、2020 年度にコロナ禍の影響で受験機会の持ち越しを認めた特例措置利用者を含め、最終二次審査まで実施することが出来た。

審判登録者数は、前年度比 86.7%と約 7,100 名減少した。コロナ禍の影響で活動が従来よりも制限されたこと、2021 年度から E 級審判ライセンスが 2 年に一度の更新に変更となったことなどの影響と考えられ、E 級ライセンスについては初級者向けライセンスとして一定数が数年で入れ替わることを前提に、特に U18 世代を中心に毎年取得者増に取り組みつつ取得者の拡大と継続層を増加できるよう、審判活動の啓発や、継続しやすい環境整備を目指していきたい。

2021 年 7 月に開催された東京オリンピックでは、JBA 公認プロフェッショナルレフェリーの加藤蒼樹氏が全世界から選出された 31 名の担当審判員の一人として女子 3 位決定戦を含む男女計 5 試合を担当した。このことはバスケットボール界にとって明るいニュースであり、加藤氏のレフェリングは、国内外の審判員の規範となった。

VI 普及・啓発活動

1. 普及事業概況

キッズ関連事業として、北海道協会の協力を得てキッズサポーターリーダーモデル講習会、キッズサポーター講習会を対面にて実施することが出来た。また、モデル講習会の内容を受け、再度カリキュラムを整理するとともに講習教材作成に取り組んだ。

その他、普及・登録推進に向けて、全国専務理事連絡会でのディスカッションの実施、新たな制度の検討などを行った。

2. 各種啓発活動概況

アンチ・ドーピング活動として、日本アンチ・ドーピング機構（JADA）と連携し、主な国内競技会（B リーグ・W リーグ・天皇杯皇后杯）および国内で開催される国際大会におけるドーピング・コントロールを実施。また、男女各カテゴリーにおける日本代表強化合宿ではアンチ・ドーピング教育の時間を設け強化選手・スタッフ向けの啓発活動も行った。

また、バスケットボール活動現場における暴力・暴言等行為の根絶に向け、2018 年度に【クリーンバスケット・クリーンゲーム～暴力暴言根絶～】のメッセージを発信し、現在も継続的に各種啓発活動を行っているところではあるが、今期に集約した指導者および保護者向けのアンケート結果からも明らかとなっており、依然としてアンダーカテゴリーの活動現場では指導者による暴力・暴言等行為がはびこっている現状がある。

そこで、子どもたちが楽しく、安心して、安全にバスケットボールに取り組めるよう、「バスケットボールファミリー安心安全保護宣言」として示し、バスケットボールに関わるすべての者が心掛ける行動と目指すべき方向性を明確にした。今後、この宣言を具体化すべく、関係各所と連携・協力して事業を展開し、より健全なバスケットボール環境を構築していく。

Ⅶ 出版物等販売事業

1. 出版物等販売事業概況

今期は競技会事業がほぼ予定どおり実施されたことにより、公式スコアシート、公式スコアブックなどの売上が2020年度比で2倍となった。

一方、競技規則は前年度の大幅改定の影響により売上が伸び悩み、出版物全体としては2020年度比で104%の収入となった。

Ⅷ 認定および登録管理

1. コーチライセンス概況（2021年度：2021年4月～2022年3月）

コロナ禍ではあったものの、各都道府県でのD級、C級の講習会が徐々に開催できるようになり、D級以上の人数も若干ではあるが前年度を上回った。（D級以上※S(F)級、A(F)級、B(F)級を除く：+272人/101%）

また、eラーニングで取得できるE級は約7,800人の新規受講があり、登録者数は7万人を超える状況となった。（全体：+5,576人/109%）

<コーチ登録数>（単位：人）

S級※	A級※	B級※	C級	D級	E-1級	E-2級	E級	合計
134	272	1,027	11,325	10,581	12,241	15,290	20,082	70,952

※ S(F)級、A(F)級、B(F)級コーチを含む

2. 審判ライセンス概況（2021年度：2021年4月～2022年3月）

審判ライセンス取得者（登録数）は前年度比7,104人減（86.8%）の46,768人、審判インストラクターライセンス取得者（登録数）は前年度比38人増（101.1%）の3,263人となった。

【審判登録数】（単位：人）

S級	A級	B級	C級	D級	E級	合計
145	283	4,745	7,993	11,969	21,633	46,768

【審判インストラクター登録数】（単位：人）

T級	1級	2級	3級	合計
26	95	343	2,799	3,263

3. チーム、競技者（3x3を含む）の登録概況（2021年度：2021年4月～2022年3月）

コロナ禍の影響で大きく減少となった2020年度より全体の登録数は回復した部分はあるが、依然一般カテゴリーの登録数がマイナスとなった。

●チーム加盟数

	2021年度	2020年度	前年比	
U12	8,375	8,194	102.2%	+181
U15	12,879	12,435	103.6%	+444
U18	7,751	7,620	101.7%	+131
一般	2,948	2,969	99.3%	▲ 21
計	31,953	31,218	102.4%	+735

●競技者登録数

	2021 年度	2020 年度	前年比	
U12	146,626	135,058	108.6%	+11,568
U15	222,581	186,495	119.3%	+36,086
U18	139,413	127,859	109.0%	+11,554
一般	43,100	44,515	96.8%	▲ 1,415
計	551,720	493,927	111.7%	+57,793

●3x3 登録数

	2021 年度	2020 年度	前年比	
3x3	1,556	612	254.2%	+944

IX 組織運営

1. 諸会議の開催、運営概況

今期の評議員会、理事会といった公益法人としての必置機関の運営面においては、先期から引き続き、コロナ禍の影響により、ほぼ全ての会議を WEB 会議形式にて開催する結果となった。

また同じく、専門委員会、特別委員会、大会実施委員会等各種委員会の活動についても、ほとんどの会議において WEB 会議形式での開催を余儀なくされたが、一部対面開催での実施も再開されるようになり、各担当が状況に応じて開催方式を上手く使い分け、コロナ禍を経て順応していることが伺えた。

アフターコロナにおいても、会議運営はおそらく利便性等の面でメリットも多い WEB 開催が主となり、必要に応じて対面開催を実施するなど、良い意味でビフォーコロナとは異なる様相を呈するようになるだろうことが推測される。

各種委員会の具体的活動としては、専門委員会として新たに指導者養成委員会およびアスリート委員会、大会実施委員会として U18 リーグ戦推進委員会を設置して各々の諸活動を推進したほか、2021 年 9 月の暴力行為等通報窓口の設置により、裁定委員会においてこれまで以上に案件が増加し、会議が活発に開催されたことなどが特筆される。

2. アンダーカテゴリー部会の運営概況

今期のアンダーカテゴリー部会の運営にあたっては、先期に引き続き、コロナ禍の影響を大きく受け、全国大会に関しては実施できたものの、ブロックや都道府県における競技会は急遽中止となるケースも多く、活動制限等が生じた。また、2021 年 10 月からの JBA 組織体制および各種委員会の体制変更に伴い、U12/U15/U18 各カテゴリー部会ではブロック幹事を中心としたメンバー構成へと体制変更を行った。ほとんどの会議において WEB 会議形式での開催となったが、諸課題の整理と対応策の検討を行い、都道府県協会 U12/U15/U18 各部長と連携を取りながら都道府県の状況把握と課題に対する対応を促した。

U12 カテゴリー部会では、先期に実施した U12 世代の競技環境に関する保護者アンケートの結果を報告書としてまとめ、U12 世代の指導の在り方やチーム運営の在り方を示した指導ガイドラインを作成し、周知を図った。また、U12 世代においてバスケットボールを楽しむ競技環境を整えるため、現状の課題整理と方策を検討した。さらに、2022 年 6 月の全国部会長会議では都道府県 U12 部会長に対して足育・足守事業に関する勉強会を開いた。

U15 カテゴリー部会では、U15 世代の活動促進に向けて、現状の課題整理と対応案について検討を行った。また、全国 U15 選手権では初めての試みとして、育成の考え方を重視しているチームを評価する推薦チーム枠を導入。さらに、2023 年度以降の運動部活動の地域移行に伴う課題点の洗い出しを行い、今後の対応策について議論した。

U18 カテゴリー部会では、U18 リーグ戦構想案に基づき、U18 関東ブロックリーグを先行実施した。また、U18 世代の活

動促進に向けて、都道府県協会 U18 部会の運営体制の構築を目指し、全国部会長会議等を通じて認識の共有を図った。

3. D-fund 制度の運用概況

2021 年度の D-fund 制度運用にあたっては、前年度同様に「重点推進事業」を設け、JBA が推進する事業へ優先的に交付をすることとし、新型コロナウイルス感染症対策に関する費用および熱中症対応に関する費用を対象経費とするなど要項を更新した。また、前年度に引き続き、コロナ禍の影響もあり、2021 年 6 月および 8 月に 2 度事業振替・変更を可とし、ファンド A からファンド B への最大 100 万円の移行を可とする対応を行うなど、都道府県の実態に即した対応を行った。最終的な確定額については、当初の事業からの振替・変更等も行ったが、2022 年に入りオミクロン株の拡大の影響もあり、対象事業が実施できずに返金が生じることとなった。

なお、2022/2023/2024 年度の 3 カ年は、ファンド B においては競技者登録数や指導者・審判登録数をポイント化して上限額を定める計画としており、2022 年度はファンド A においては 2019 年度の総額からの差額分を上限額として事業申請して頂き、内示額を決定した。また、コロナ禍の影響によって登録数が減少していることもあり、登録推進に向けた登録制度の見直しを検討しており、それに伴った D-fund 制度の見直しについても検討している。

4. 暴力行為等通報窓口の概況

懸案事項であった指導者等によるバスケットボール活動現場での暴力・暴言等行為に関する通報窓口を 9 月に設置し、新設したコンプライアンス推進グループにてその運営を行った。通報対応においては、被害者および通報者に寄り添った対応を行うとともに、裁定委員会や都道府県協会・各種連盟とも連携し、迅速かつ適正な手続きによる懲罰や注意喚起等を実施した。

5. 裁定委員会事業の概況

裁定委員会では、主に JBA に登録する指導者・審判による倫理規程違反の調査および事実認定を行い、懲罰案を理事会に答申しているが、暴力行為等通報窓口設置に伴い、調査のための聴聞や委員会の開催回数、理事会への答申件数が大幅に増加した。

今後も適正な手続きのもと、バスケットボール界における秩序維持・コンプライアンス向上を図るとともに、必要に応じて具体的な再発防止策等を提言していく。

X 広報

1. 広報活動概況

先期に続きコロナ禍の影響を大きく受け、対面での広報 PR 活動には大きな制限を受けた今期だったが、先期と同様、天皇杯皇后杯、ウインターカップ、ジュニアウインターカップといった主要大会が通常通り開催されたことに伴い、ファンのニーズに応えるべく各種コンテンツの整備・拡充を図った。

今期最大のトピックは言うまでもなく東京 2020 オリンピックであったが、5 人制男子代表における海外組の合流、3x3 男女の奮闘（入賞）、そして何より女子代表のオリンピック史上初の銀メダル獲得を追い風に、メディア（特にテレビ）への働きかけに注力し、過去類を見ない露出を実現。新規ファンの獲得に向け、前向きに動けた期であったと振り返ることができる。

対外メディア対応においては、コロナ禍により取材制限、あるいは入場制限等を継続せざるを得ず、上記のとおり、対面対応は非常に難しい状況が続いたものの、個別に密なコミュニケーションを図ることに努めた。その結果が、オリンピックに関連した各種報道をはじめとする露出拡大に繋がったと考えている。

今後については、一昨期よりスタートした「INSIDE AKATSUKI」コンテンツの成功を例に挙げるまでもなく、バスケットボー

ルの露出強化、価値向上について SNS の影響力は大きく、SNS による情報発信を引き続き重視。アンダーカテゴリーや 3x3、あるいは各種イベント関連等、発信の幅を多方面へと広げる施策は、来期においても更なる拡充を行っていく予定である。

その他、競技運営・育成・審判等、JBA 内各部門の協力の下、関係者向けの情報についても適切なタイミング、内容についての情報開示に努め、いわゆる「内部広報」の視点においても整備・注力してきたが、各所の活動はますます活発・幅広に展開されている状況であるため、現状で足踏みすることなく、各所の要望等も聞き入れながら、今後も引き続き取り組みを強化していく。

関係各所（都道府県協会、B リーグ、W リーグ、スポンサー各社等）との連携をより深め、柔軟な発想でステークホルダーの期待に応えるべく、広報 PR 業務を委託する BMK とともに、バスケットボールの価値向上・認知度アップに繋げていきたい。